



アジア・アフリカ地域研究研究科 におけるFD

アジア・アフリカ地域研究研究科
伊谷樹一



教育理念・人材養成の目的

1 教育理念

アジア・アフリカを対象として、地域を総合的に捉えて問題群を発見し、それに積極的に取り組んでいくことができる先導的な地域研究者および地域実務者を育成することにより、地球、地域、人間の共生に向けて寄与することを理念とする。

2 人材養成の目的

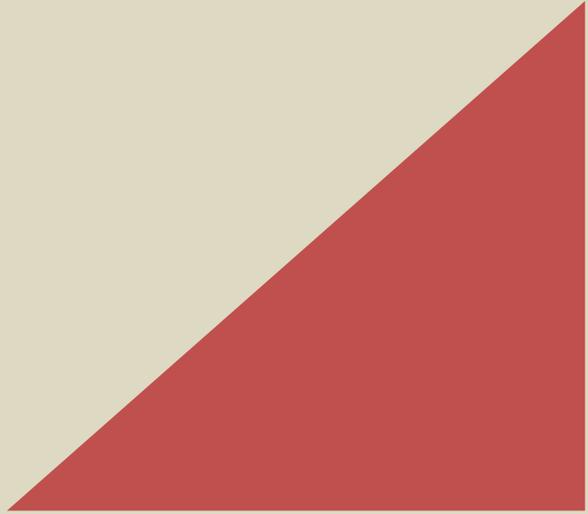
地球、地域、人間の共生のためには、言語文化領域や民族、国民国家と関連しつつも位相を異にする地域についての総合的で深い理解が必要である。そのためには、生態、社会、文化、歴史の交差する場である地域に関わる文理融合的な知を蓄積することや、地域の固有性と多様性をフィールドワークをとおして十分に把握することが要請される。

研究科の特色

学生は、主体的にフィールドワークに取り組み、地域の現場での生活を通して問題を発見し、生態・社会・文化が複合する地域の実態の調査研究を進めていく。教育カリキュラムは、フィールドワークを基礎とした調査・研究に指針を与えらるとともに、調査の結果を独創的な研究にまとめあげていくプロセスを支援・指導していくことを主眼として構成されている。



本研究科のFDの取り組み

- フィールドステーション
 - 魅力ある大学院教育イニシアティブ・プログラム
大学教育改革支援プログラム
 - 若手研究者インターナショナルトレーニング
プログラム(ITP)
- 

フィールドステーション

2002年度から2006年度まで実施された21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成ーフィールド・ステーションを活用した臨地教育体制の推進」では、アジア・アフリカ地域研究に関する先導的な教育・研究拠点の形成をめざし、アジア・アフリカの各地にフィールド・ステーションを設置し、それを利用した臨地教育・研究の推進をはかった。このフィールドステーションはG-COEプログラム「生存基盤持続型の発展を旨とする地域研究拠点」に引き継がれ、現在12カ国で運営されている。フィールドステーションでは、現場でのインテンシブな研究と大学院教育を実施している。また、ここでの活動をとおして、当該地域の研究・教育機関と連繋し、双方向的かつ多中心的な研究・教育ネットワークを形成している。

魅力ある大学院教育イニシアティブ・プログラム

「臨地教育研究による実践的地域研究者の養成」 フィールドワーク・インターンシップによる臨地教育研究

この事業は、生態・社会・文化に根ざした地域の固有性を理解していることはもちろん、地域が直面する現代的諸問題を研究課題として発見し、さらに地域住民やNGO、国際機関などの諸アクターと協調して、それら課題への実践的な回答を究明してゆく資質を備えた実践的地域研究者の養成を目的とする。

このプログラム(2006年度・2007年度)では、インターンシップ・問題発見型フィールドワーク・国際学会発表などを支援してきた。

大学院教育改革支援プログラム

研究と実務を架橋するフィールドスクール

このプログラム(2008年度～2010年度)では、アジアとアフリカ諸国において研究と実務を有機的に結びつけるインターフェイスの役割を果たすフィールドスクールを設け、そこを舞台に実務的マインドを持つ研究者、研究的マインドをもつ実務家の育成をめざすものである。

プログラムは、以下の4本柱で構成される。

- (1) フィールド・スクール
- (2) 院生発案共同研究
- (3) 研究発信トレーニング
- (4) 言語を主とする地域研究教材開発

大学院教育改革支援プログラム

研究と実務を架橋するフィールドスクール

(1) フィールドスクール

1年間のうち、アジアとアフリカそれぞれ1～2カ所に2週間～1ヶ月間フィールドスクールを開校している。同地域で活躍してきた実務家（国際機関、NGO関係者など）と本研究科や現地提携大学などの教員がフィールド講義・フィールド演習をおこなってきた。参加者は、本研究科の院生と現地大学院生をおもな対象とした。

フィールドスクールは、本研究科が G-COEによってアジア・アフリカ諸国で運営しているフィールドステーションを利用することを基本としているが、フィールドステーションが設置されていない地域では、現地提携大学等と連携しながら開校している。内容は、「人と自然のかかわり」、「民族と宗教」、「難民問題」、「環境・資源・エネルギー」、「開発援助」、「言語と思想」、「環境問題」といった、地域と密接に関連した事項をテーマとし、フィールドでの演習もまじえながら、国内での講義を補う実践的教育に重点をおいた。

大学院教育改革支援プログラム

研究と実務を架橋するフィールドスクール

(2) 院生発案共同研究

複数の院生がひとつのグループを組織し、院生の発案により大きなテーマ(例えば「アジアとアフリカにおける地域的共生の論理」等)を設定して、そのテーマのもとに自分の研究テーマをその中に位置づけ比較の視点をもちながら調査・研究をおこなう。これによりさらに領域横断的な視点から問題を考察する力が養われている。共同研究にとりくむ院生は、海外でワークショップを組織・実施して、研究成果を現地にも還元し、帰国後には成果集を刊行している。

大学院教育改革支援プログラム

研究と実務を架橋するフィールドスクール

(3) 研究発信トレーニング(国際協力のための実務基礎教育)

フィールドスクールを実施前に国内における事前研修として、国際協力のための実務を学ぶ短期集中コースをおこなっている。具体的には、外国人研究者や実務家をアドバイザーにむかえて、英語による研究計画書の作成や英語によるプレゼンテーションのトレーニングをおこない、年に一度、研究計画書の講評会および英語による発表会を実施している。

大学院教育改革支援プログラム

研究と実務を架橋するフィールドスクール

(4) 言語を主とする地域研究教材開発

現地語でグローバル社会、ローカル社会を理解することをめざした教材作成をおこなう。現地語による新聞や公文書の読解、臨地調査をおこなう過程で必要となる専門用語、さらには現地独特の知を表す概念語等を採録し説明を付した用語集(現地語 日本語)を、教員が編集し、フィールドスクールに提供して、参加者のその後の研究・実務の過程に役立てている。

若手研究者国際ナショナルトレーニングプログラム

文理融合型地域研究は、地域の上部構造から下部構造までを、人文科学、社会科学、自然科学の協働によって幅広く観察・理解しようとするもので、その基礎となる言語を着実に理解することで当該フィールドの文化の全体像に迫ることができる。この事業(2007年度～2011年度)は、地域研究に必要な現地語の習得を通して地域の全体像に迫ることを第一の目的とし、同時にその成果を国際的に発信する力の強化を第二の目的としている。

この事業では、若手研究者を各々の研究分野に最もふさわしい現地研究機関に派遣し、そこで専門性の高い語学トレーニングを受けさせる。

若手研究者国際ナショナルトレーニングプログラム

- **インプット・レベルからアウトプット・レベルまでをカバーする教育体制**

この事業では、とくに博士前期課程相当の最も若い研究者の情報インプットに最大の便宜を図るべく、地域研究現地語習得のためのフィールド派遣を柱の一つに据えている。

他方、博士後期課程・ポスドクから助教レベルでは、情報インプット能力はすでに相当程度開発されているとはいえ、国際社会への発信が行えるアウトプット能力を強化する必要がある。この事業では、英語のみならず、フランス語およびアラビア語を、アウトプット・レベルの対象としている。